

時をふく笛口

遠藤周作



ふく時

遠藤周作



講談社

口笛をふく時

昭和四十九年八月三十日 第一刷発行
昭和四十九年十一月八日 第三刷発行

著者 遠藤周作

編集・制作 第一出版センター

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話(九四五)一一一一(代表)振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© Shūsaku Endō 1974, Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えいたしません。(セ)

口
笛
を
ふ
く
時

装
幀・荻
太
郎

プロローグ

「失礼ですが……」

小津はゆっくり眼をあけた。

この新幹線のなかで何時の間にか、眠っていた。冬のわびしい陽差しが浜名湖の鉛色の水面にさして、二、三隻の小舟が浮いている。

「失礼ですが……」

声をかけた男は人なつこい、懐しげな表情をうかべて、

「小津さん、じゃあ……ありませんか」

「はあ」

眼をしばたたきながら小津は相手の名を思いだそうとした。

この年齢になると物忘れがひどくなった。時折、こんな風に、突然、だれかに声をかけられることがある。出会った記憶のある顔だが、相手の名前も自分との関係もどうしても思いだせない——そんなことが数多くなったのだ。

「上田です。覚えておられませんかな」

男は困ったような表情をして、

「灘中時代、御一緒だった……上田です」

「ああ、これは、これは……」

小津は思わず声をあげた。だが、上田という名も、その男の中学の頃の顔も記憶の層のどこにもなかった。

「さきほど、ビュッフエに行く途中、この車輛を通った時、チラッと拝見しましてね、どこかでお目にかかった顔だと考えていたのですが、食事しながら、急に思いだしたのです。あなたとはクラスがちがっていたが……」

「ほう」

「修学旅行の時、同じ部屋でしたよ」

上田は小津の記憶を助けるように、

「その時、財布をなくされてね」

「私？」

「ええ。みんなで探しましたよ。出発がおくれて、チューアンがひどく怒ったでしょう」

手洗いに行く婦人を通すため、上田は体を横にして小津の肩に手をおいた。

「チューアン。思いだしました。体操の教師の……」

そう、そんなこともあったつけ。小津のひからびた唇に微笑とも苦笑ともつかぬ笑がやっと浮かんだ。チューアン。体操の教師。穴から出てきた鼠ねずみそっくりの顔をしているために生徒からそんなあだ名をつけられていた先生だ。

「どうされています、あの先生は」

「おや、御存知なかったですか。戦死されましたよ。中支で」

「そうですか」

小津は溜息をついて、

「長いあいだ、灘中の先生たちにも御無沙汰しております……」

「同窓会にはあまり出られませんか」

「出ておりません。通知を頂戴しておらんものですから」

「そりゃ、いかん」

上田はしばらく小津の顔を覗きこむようにして、

「名簿にきつと記載洩れなのですな。私から幹事に連絡しておきましょう。名刺を頂けますか」

列車は浜名湖を過ぎていた。工場の煙突から、ゆっくり煙がながれ、遠くに団地の白い建物が午後の陽ざしをうけて並んでいた。

「今は灘中も我々の頃とは違うて、秀才学校に変わりましたよ」

「そうらしいですな、わたしらの頃はほかの中学を落ちた連中も入学してきたもんですが……」

名古屋でおりるという上田が自分の車輛に引きあげたあと、今、もらった名刺にじつと眼を落としてみれば三十年以上も前の記憶におのずと浸りはじめた。

（そうか、灘中か）

あの学校を自分が出たというのが、ふしぎなくらいだ。

時折、灘高の話を目にしたたり、週刊誌で読んだりすることがある。彼が通学していた時とはすっかり違って、今では秀才ばかり集まる高校に変わってしまったようだ。東大などの入学率も全国で上位にランクされているらしい。子弟をこの高校に入学させるため、わざわざ、阪神に住居を変える父兄もいると耳にしたことがある。

「父さんが灘を出たとは信じられんね」

むかし息子からそう言われたことも小津にはたびたびあった。

「どうして」

「だって、強敵だよ。あの学校の奴は」

その頃、受験勉強をしていた長男はいかにも憎らしそうに

「あの学校じゃ一年でもう普通の高校の二年分を教えてしまうと云うんだから。むかしはそうじゃなかったんだろ」

「父さんの頃か……まだ、そこまでは、やっていなかったな」

小津はその時、首をふったのを憶えている。

「もっと、ノンビリしていた。成績順にクラスをA、B、C、Dの四つにわけて、秀才はA組に入れたけれど、C組やD組はできない連中の集まりだった」

「父さんはいつもD組だったのか」

「いや、BとCとDを往復していた」

そうだ。あの頃の母校はまだ、のんびりとした何かがあった。

御影にちかい住吉川のほとりの松林に建てられたクリーム色の建物。その右に木造の柔道場があるのは、この学校が柔道の始祖嘉納治五郎が建てたためである。柔道は生徒全員の正課になっており、小津が入学した頃はドブ先生という柔道教師がいたっけ。

眼をつぶって小津は母校の校歌を思いだそうとしたが、あの頃、歌いなれていたその歌が、すっかり古くなった頭には浮かんではこなかった。そのかわり講堂にかかげられてあった「精力善用、自他共栄」という嘉納先生の八つの文字が突然、心に甦よみがえってきた。

ながい間、あの学校を訪れたこともない。

同窓会にも出席したこともない。

一緒に机をならべた連中の消息もほとんど知らぬ。

物理の先生の名は何といったっけ。名は思いだせぬが、あだ名だけは記憶に残っている。ガスマスクは小津が三年生の時、お嫁さんをもらった。頭髪がうすくなつて頭の地肌が髪の間からチラホラ見えるために「明暗」とよばれていた図画の先生は授業中、いつもターナーの話ばかりしていた。教頭のキンカン先生は文字通りキンカン頭を光らせて古墳のことを教えてくれた。

C組やD組の連中は、授業中、いつも悪戯をするか、居眠りをしていたものだ。

「お前たちにはまったく教え甲斐がないのう」

とある日、一人の先生が溜息をついた。

「何を教えても、わかってくれん」

教え甲斐のない生徒のなかに小津も加わっていた。柴坂もいた。佐藤もいた。モンキーこと津川もいた。ペソもいた。あいつは何といったっけ。あの三年から転校して来た男は……。

灘 高

「私たちは自習室にいた、と、校長が新入生と机をかついだ小使とをつれて教室に姿をあらわした。居眠りをしていた連中は眼をさまし、みんな勉強中のところを不意うちをくったように立ちあがった。

すわれ、と校長は合図してそれから監督教師にむき、ひくい声で、
『この生徒をたのむ。一応、二年級に入れるからな』

扉のかげでよく見えなかったが、新入生は十五ぐらいの田舎出の子で、私たちより背も高かった。
村の聖歌隊よろしく前髪をおかっぱにして、まじめくさった、そのくせ、ひどくきまり悪げな顔をしていた……」

フローベルの小説「ボヴァリー夫人」の冒頭はこんな場面が始まるが、この午後、この新幹線のかで記憶のフィルムを元に戻している小津の頭に、ゆっくり水泡のように浮かんだのも、あの男が新入生として教室に連れてこられた日のことだった……

図画の時間だった。小津たち三年C組の生徒たちはアクビを嚙みしめながら明暗というアダ名の老先生の説教を聞いていた。

「イギリスの画家ターナーはねえ、どんな逆境にあってもねえ」

うしろ向きの先生の頭は毛がうすく、渋茶色の地肌がまるく見えた。

「決してひるまなかったねえ。たとえばだ」

不幸にして小津はそのあと明暗先生が何を話されたかは一向に憶えていない。なぜなら彼も他のC組の仲間たちと同じようにこの時アクビをしたり、鼻糞をほじったりしていた一人だったからだ。

灘中では学業成績の優秀な者をA組に入れた。まあまあという生徒はB組に加えられた。そして箸にも棒にもかからぬ連中をC組かD組にまわした。

「ターナーは努力の人だったねえ。だからお前たちも努力さえすればね……来年A組にのぼれないことはない」

明暗先生は励ましの意味でそう言われたのだが、誰も聞いている者はいなかった。みなはただ、一

分でも早く授業が終らぬか、早く昼飯の時間にならぬか、とそればかり考えていた。

「ああ、あ——」

突然、教室の真中あたりで一人の生徒が牛の鳴くように長いアクビの声を洩らした。

「誰だ」

明暗先生は腹をたてた。

「不作法な声をだしたのは……不謹慎である」

その時、扉があいて教頭が新入生をつれてきた。「マダム、ボヴァリー」の冒頭のように……

「みんな、そのままで」

教頭は灰色のうすぎたない制服を着た少年をあごで示しながら、

「加古川の中学から転校してきた平目^{ひらめ}君だ」

机のあちこちから忍び笑いが小石を投げた池の波紋のように拡がった。平目。なんや。こいつは。名もケッたいやが、顔かて魚のようにケッたいな奴やで。

少年は金魚鉢のデメ金のように眼をシヨボシヨボさせながら背をまげて教壇の横に立っていた。

「みんなも親切に、色々、教えてやりなさい。学校に平目君がなれるまで」

それから教頭は眼ざとく、小津のうしろの空席をみつめて、

「一応、あそこに腰かけて、おとなしく授業を聞きたまえ」

教室の窓の外から号令をかける配属将校の塩から声が時折きこえてくる。

そう。中国ではながい戦争がまだ続いていた。この灘中にも最近二人の退役軍人の教官のほかに現役の少佐が配属将校として着任してきた。

「ターナーはねえ」

教頭が去ると、明暗先生はさきほど大声でアクビをした生徒を叱ったこともすっかり忘れて、生徒たちにとっては退屈な人生教訓を続けはじめた。

小津はうしろに着席した新入生がゴソゴソと身じろぐのが気になって仕方なかった。気になると言えはその背後の席から、ほのかな、臭気がただよってくるのだ。沢庵と汗とのまじったような異様な臭いで……

「あのな……」

急に背中を指でつつかれた。ふりむくと眼をシヨボシヨボさせた魚のような顔が彼をじっと見ていた。

「あのな」

「なんや」

「今、何、教えとんや」

小津は明暗先生に気づかれぬよう、小さな声で、

「凶画」

と答えた。

それから、しばらくの間静寂が続いた。静寂のなかで背後のゴソゴソと身じろぐ音と、言いようのない妙な臭いとが小津の心を乱した。

「あのな」

また背中をつついてくる。

「なんや」

「今、なん時や」

小津は返事をしなかった。転校生のくせにうるさく背中をつつき、しつこく話しかけてくる。狎々しくて、ズウズウしい奴だと思う。

突然、クーウーウという長い、物がなしい間のぬけた音が平目の席から聞えてきた。その音をきいたのは小津だけではなかった。C組の全員がびっくりするほど、このクーウーウという家鴨が咽喉をつまらせたような物がなしい音は二度もつづけて鳴った。

生徒たちは笑いをこらえて、うしろをふりかえった。

「なにごとか」

明暗先生は机の両端に手をつきながら、ひどくきびしい顔をされた。

「今、妙な音をたてた者は、立て」

眼をシヨボ、シヨボさせながら平目は不器用に椅子から起立した。

「お前か」

「へえ」

と平目は悲しげに答えた。

「腹が、鳴りましたんや」

教室中、笑いの渦がまき起り、明暗先生だけが情けなそうな表情だった。

「ぼくが鳴らそう思うて、鳴らしたんやありません。勝手に鳴りよるんや、腹が」

「坐れ」

「へえ」

おとなしく平目は席に腰かけた。もう授業を真面目に聞いている者は一人もいなかった。ターナーはと先生だけが相変らず同じ話をつづけていたが、クラスの生徒たちは舌をだして顔をしかめてみせ

たり、大ぎように口をあけて小津や平目の席を窺いみていた。

「ターナーはえらい人でねえ」

放課後になると――

学校の正門から松林をぬけ、小さな住吉川にそった道を蟻の列のように帰校の生徒たちが歩いていく。

薄黄色い制服を着た彼等は当時の阪神の中学生たちがすべて、そうであつたように、ゲートルをまき、軍靴のようなダ靴をはいていた。

同じ恰好だが、よく見ると、A組とC、D組の生徒との区別はすぐわかる。

雄鶏のようにスマして、首をあげ、学校から命じられたままに電車の停留所まで向っていくのは、たいていA組の秀才たちである。時には彼等のなかには、英単語のカードに眼をやり暗記しながら歩いている者もいる。

そのうしろから、肩にぶらさげた鞆をだらしなくブラン、ブランとさせ、友だち同志で奇声をあげたり、立ちどまつたりするのはきまつてC組、D組の連中だった。

だが、ふしぎなことがすぐ起る。

雨の日のほかは水のほとんどないこの住吉川ぞいの道が、ちようど、大阪と神戸とを結ぶ国道にたどりつくあたりで、列をなした生徒の足が急に遅くなるのだ。小さな鯛焼の屋台がいつもそこに置いてあつて、そこから、甘い餡とメリケン粉を熱する匂いが空腹の彼等の鼻をほかに刺激するからだ。学校では生徒たちにいっさいの買食いを禁じていたから、たちどまるわけにはいかない。もし見つかれば、すぐに教員室に連れていかれ、悪くすると、登校禁止一日をくらってしまう。

だから――

生徒たちはこの地点までくると、歩調をゆるめ、鼻孔を大きくふくらませ、ただ、そのほのかな匂いを嗅ぐだけで我慢するだけだった。

その日、皆と少し離れて歩いていた小津も同じ気持だった。食べざかりの年齢である彼には午後三時頃が一番、腹がすぐ。彼もまた眼をつぶり、その甘ったるい匂いを吸いこんでいた。

誰かが、うしろをつついた。ふりむくと、平目だった。

「君、十銭あらへんか」

相変らず眼をシヨボ、シヨボとさせて平目は呟いた。

「ある」

「そんなら買えや」

「あかん」

小津は首をふって、

「先生に見つかったらエラいこっちゃ。それに上級生のなかに風紀委員もおるさかいな。つかまるで」

「そやけど……」

平目は眼をしばたきながら、切ない顔をして呟いた。

「食いたいのもの、食うて、なぜ、いけんのやろ」

「見っともないからや」

「鯛やき、買うのが、なぜ、見っともないんや」

「俺たちが中学生やからや」

「中学生が鯛やき、買うのが見つともないのなら、誰が買うたら見つともええのや」

小津は眼をシヨボシヨボさせて、ひとり呟いている平目の魚のような顔に何と答えていいのかわからなかった。

鯛やきの屋台をすぎると、今度は妙な臭い^{にお}がした。平目の例の体臭だった。

「お前……風呂に入っとるのか」

「風呂、きらいや。俺」

国道に出た時、小津は

「電車に乗るんか」

とたずねた。彼自身もこの国道を走る褐色の古ぼけた電車を利用して通学していたのである。

「そやで」と平目はうなずいた。

「西宮に住んどんねん、ぼく。西宮三丁目まで乗るねん」

「ふん、俺は夙川や」

「夙川、ぼくと同じ方向やな」

しかし小津はこの臭い少年と電車に乗ることに気がひけた。この国道電車には前の停留所からやはり彼等と同じように学校から帰宅する甲南の女生徒たちがいっぱい乗りこんでくる。沢庵の臭いのような平目の体臭を彼女たちはどんな顔をしてかぐだろうか。

白いセーラー服を着た彼女たち。その白いセーラー服の肩もまろく、胸もふっくらとしている娘たち。彼女たちと同じ電車に乗りあわせると小津はなぜか体全体が堅くなってしまう。おたがい同じ年ぐらいなのに、彼女たちは一日ごとに美しくなり、自分たち男の子は一日ごとに醜くくなっていく。ニキビがはえ、声が変わり、ゴツゴツとしてきたこの体を小津は彼女たちの前でかくしたい気持ちにさえ